

テーマ	一人暮らし高齢者へのエコマップ活用に関する一考察 ～退院後の生活状況のインタビューをもとに～		
所属する 都道府県社会福祉士会名	大分県社会福祉士会	会員番号	33144
所属先名称	湯布院厚生年金病院		
発表者氏名	日和 慶二		
共同研究者氏名	出崎智美 (28818)、桑野慎一郎 (MD)		

**研究目的：**近年、社会がめまぐるしく変化し、人々を取り巻く環境は複雑多様化している。そのようななかで、医療機関に勤務するソーシャルワーカーは、クライアントの生活再開に向けた課題を捉え、病気を抱えつつも退院後の生活がより豊かになることを目的に支援を行っている。筆者は以前、パワーレスとなったクライアントに対し、クライアントが自身を取り巻く豊かな環境に気づき、環境に働きかける力を強められるようエコマップを活用し生活再開に向けた支援を行った。そこで、本研究ではそのクライアントに対するインタビューをもとに、エコマップを共同作成したことが退院後の生活にどのように活かされているかを考察することを目的とする。

**研究方法：**①エコマップに関する先行研究をレビューする。②エコマップを活用し支援した事例を整理すると共に、クライアントに対しインタビューを行う。インタビューの項目は、退院後の在宅での生活状況とエコマップの共同作成がクライアントのその後の生活にどのように活かされているかの2点である。クライアントの語りを元にエコマップ活用の有効性について考察する。

**倫理的配慮：**クライアントに対し、本報告の趣旨と内容について説明し、文書にて同意・承諾を得た。

#### 事例概要：

【クライアント】A氏 70代後半 女性 【疾患】腰部の整形疾患

【入院までの経過】ADLは自立。しかし、歩行時の疼痛により外出機会は減少していた。子どもはおらず、夫は数年前に他界。近隣在住の甥（キーパーソン）や姪の協力を得て一人暮らしを行っていた。今回、近隣住民の勧めにより当院受診、手術目的で入院となった。

#### 【入院中の経過】

【前期】A氏との初回面接にて、甥や姪、民生委員等周囲との関係が良好でありサポートを受けている事を確認した。生活再開に向けた不安感等はなく、今後は術後の経過をみながら生活再開に向け課題を抽出し必要な関わりをもつこととした。

【中期】手術後、リハビリテーションは順調に経過し、生活再開に向けて試験外泊を実施。自宅では動作面等特に困ることなく過ごせたが、この頃よりA氏が一人暮らしの再開に不安を示すようになった。筆者はA氏の不安を受けとめつつ、本人が抱える漠然とした不安な気持ちを具体化することに努めた。面接を重ねるなかで、A氏は一人きりになることの寂しさや心細さ、夜間にサポートしてくれる人がいないなどの不安を表出した。

A氏は一人になることへの不安から施設入所も考えているようであったが、自宅復帰の意向もあり、今後の生活に対する迷いがある様子であった。よって、A氏の不安を再度確認しながら、社会資源等の情報提供を行い、不安の軽減を図るための方法を共に検討した。

社会資源を紹介したことによってA氏からは「安心できる」「心強い」などの言葉が聞かれたが、A氏の表情からは不安が解消されたようには感じられなかった。A氏はこれまでの面接の中で何度も「一人きりになる」と語っていたため、A氏の不安の背景には孤独感があるのではないかと考えた。入院時面接において筆者はA氏を取り巻く環境はサポートティブなものであると捉えていたため、A氏の言動との間に乖離を感じた。そのため、A氏が自身を取り巻く環境に気づき、今後の生活を再度検討していくことが必要ではないかと考えた。

A氏が自身の環境を客観的に捉えるためには、A氏が自分自身で自らの置かれている環境に気づく必要があると考え、エコマップを共同で作成することとした。エコマップの作成を通して、A氏の課題を捉え、解決していく力や地域の繋がりを維持し、地域で暮らし続けていく力を強めることができるのではないかと考えた。エコマップを描くことによって、話をするのが苦手であったA氏から病前の社会関係や具体的な生活の様子を聴くことができ、それをもとに、生活の検討を行った。

【後期】エコマップ作成前に頻繁に聞かれていた「一人きりになることへの不安」はほとんど聞かれなくなった。また、自らの置かれている環境の豊かさについて話をするなど、環境を意識した発言も聞かれるようになり、自宅復帰に意欲的になった。退院時には、入院時から現在に至るまでのA氏の変化をA氏と甥とともに振り返り、自宅退院となった。

【退院2か月後】A氏へのインタビューを実施した。

**結果：**A氏へのインタビューから、ADLは退院時と大きな変化は無く、入院前と同様に甥や姪の協力、近隣住民のサポートを得ながら生活を送っていることが分かった。エコマップの作成に関して、A氏からは「周りにいろんな人が居てくれることが改めて分かった」との発言があり、A氏が自身を取り巻く環境を意識することに繋がったと考えられる。また、入院中に共同作成したエコマップを退院後にも何度も見返し、環境を書き加えるなどしてA氏自ら活用していることが分かった。

**結論：**インタビューの結果から、豊かな環境への気づきを促すことを重視した関わりによって、A氏が在宅生活へ移行後も自身を取り巻く環境を意識しながら生活を継続していることが分かった。エコマップに関する先行研究では、エコマップの特徴と利点を「利用者と共に作成することによって事前評価（アセスメント）から具体的援助過程に至るまで、クライアントの参加が得られ、面接の道具としても極めて有効である」「視覚的に人間関係や社会関係が把握でき、記録としても分かりやすい」<sup>(1)</sup>等と指摘されている。しかし、今回の研究を通して、エコマップは単に社会関係を把握するためのものではなく、クライアントが生活し続けるための力を与えるものでもあり、クライアントがエコマップを自ら活用することの意義や可能性を発見することができた。

#### 引用・参考文献：

- (1)社会福祉援助技術研究会「社会福祉実践活動におけるエコマップ（生態地図）の作り方」.
- (2)岡本民夫・平塚良子（2010）『新しいソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房.
- (3)木原活信「児童面接にエコマップを活用した事例研究」『日本社会福祉実践理論学会研究紀要（2）』pp92-105,1994-02.

テ　　マ	中途視覚障害者緊急生活訓練事業におけるソーシャルワークの役割		
支　部　名	福岡支部	会員番号	35412
所　属　先　名　称	社会福祉法人 北九州市福祉事業団 北九州市立介護実習・普及センター 福祉用具プラザ北九州		
発　表　者　氏　名	伊東良輔		

## はじめに

福岡県北九州市では、市内在住の身体障害手帳を取得している視覚障害者を対象に「中途視覚障害者緊急生活訓練事業(以下、訓練事業)」という事業を平成10年度より実施している。本事業では、視覚障害リハビリテーションの専門職である厚生労働省認定の「視覚障害生活訓練等指導者(通称:歩行訓練士)」がその業務を担当している。人生の途中で受障した中途視覚障害者は、原因疾患による医療的なことから、生活環境まで困難に感じることが多岐に渡る。それに伴い生活スタイルの変化を余儀なくされる。そこで中途視覚障害者の支援において、障害受容の促進から社会復帰までに必要不可欠なソーシャルワークの役割について考察していきたい。

### 1 中途視覚障害者の支援の実際(ポイント)

人間は多くの情報を視覚から得ている。そのため、人生の途中で視力を失った方は、日常生活を送ることも困難な状態に陥ることが多い。これは、人間が視覚から80~90%の情報を得ているためである。では、視覚障害者が10~20%の情報だけで生活しているのかと言えばそうではなく、聴覚や嗅覚、触覚を利用する割合を高め、100%の状態に近づけて生活している。

点字を読むこと、白杖を利用して歩行すること、調理をすることも、視覚以外の感覚を使い分けることによって、生活の安全性・確実性を高めている。視覚障害リハビリテーションの専門職として歩行訓練士は「どのようにすれば感覚の使い分けを習得できるか。」、「安全・確実に物事を進めることができるか。」を視覚障害者と一緒に考え、適切な訓練を実施している。

### 2 北九州市の取り組み

北九州市が実施している訓練事業は、個別で行う訓練と集団の中で行う訓練を中心に訓練を実施している。対象者一人ひとりの見え方、生活環境、身体状況を考慮するとともに、QOLの向上を目的とした訓練を、視覚障害リハビリテーションと位置付けて訓練プログラムを計画している。内容は「歩行訓練」、「コミュニケーション訓練」、「日常生活動作訓練」、「社会参加訓練」の4つに分けられる。

生活訓練希望者は、各区の福祉相談コーナーにて訓練受講の申請を行う。申請用紙到着後、歩行訓練士が初期面接(インテーク)を行い、その面接結果より訓練計画を立案・実施する、訓練終了後の評価を行う。終了後の評価については、技術の習得だけでなく訓練全般について、訓練受講後の対象者本人の主観的評価、歩行訓練士からの客観的評価も含む。

視覚障害当事者・支援者からの相談は、歩行訓練士が随時受け付けている。また、週に2日(火曜日、木曜日)は、視覚障害当事者相談員による専門相談日を設けており、ピア・カウンセリングの役割を担っている。その他、当事者相談員が講師として実施するコミュニケーション講習会(点字・パソコン)を年間に2講座ずつ開催している。

社会参加の場として「視覚障害当事者のつどい」を月に1度開催しており、各当事者が個別訓練で得た技術や知識を活用して情報収集・提供を行うほか、仲間作りの場所となっている。

### 3 訓練事業におけるソーシャルワークの役割

本事業では対象者一人ひとりの見え方、生活環境、身体状況を考慮して訓練プログラムを計画し、QOLの向上を目的とした訓練を実施するために、初期面接(インテーク)が重要と考えている。

対象者が必要とする生活技術(SSTを含む)の獲得を支援することが本事業の目的であるが、適切なインテークを実施できなければ、レポートの形成を妨げ、対象者のデマンドのみを聴取する結果となる。

デマンドの充足は短期的な視点では対象者の QOL 向上のように見えるが、長期的な視点で見ると QOL の低下につながる場合もある。

中途視覚障害者の適切な支援を実施するにあたり、対人援助の開始としてインテークをエンゲージメントと認識し、障害受容の促進から生活技術の獲得、最終的には社会復帰までを視野に入れた長期的な視点を持つことが重要となる。

#### 4 事例

A 氏 (40 代) 男性 原因疾患:網膜色素変性症 障害等級:1 種 3 級

右:0.6(1.0) 左:0.1(0.5) 視野欠損 94% 希望訓練項目:点字

発症時期:H22.4 に眼科にて診断、以前より夜間の見えにくさを感じていた。

生活状況:妻と子 2 人の 4 人家族。在職中、危険を感じながらも自家用車にて通勤している。

訓練経過:

眼科受診にて、網膜色素変性症の診断を受け、産業医に相談したところ、進行性の疾患のため、点字の習得をするようアドバイスを受け、訓練受講を申請された。

インテーク時に失明に伴い就労の継続が困難になるのではないかという不安から、多くの情報を求めていた。また、訓練初期に「現在、車の運転をしているが、運転をやめるべきか」「白杖を携帯することに抵抗がある」との発言があり、障害受容が困難な様子が見え始めたため、今後の生活の安定を考慮した情報提供と生活訓練が必要と判断した。対象者の希望する点字訓練を通し、「生活訓練における感覚の使い分け」についての情報提供を実施し、白杖歩行等の訓練に関しても保有視覚と杖の両方を使い分けることを伝え、視覚障害＝全盲のイメージ払拭と障害受容の促進を図った。

訓練 3 回目に情報提供として、市内にある視覚障害者を雇用している企業の施設訪問を実施し、音声パソコンを使用し就業する現場を見学した。企業訪問後、白杖歩行訓練も開始し、勤務先から公共交通機関を利用した自宅までの訓練を開始、訓練中に同僚とすれ違ったが、白杖を携帯する必要性を理解しており、心理的な抵抗は軽減されている様子であった。今後、実際の帰宅時間に合わせた夜間訓練を計画している。(平成 23 年 4 月 26 日現在)

事例については、訓練受講者である本人へ説明し、同意を得たこと、並びに個人が特定されることのないよう倫理的配慮を行い、発表に関して所属長の了解を得たことを付記する。

#### 5 まとめ

中途視覚障害者の多くは、受障と同時に生活スタイルの変換を余儀なくされる。それは、本人の視覚の障害だけが原因ではなく、家族・知人から「視覚障害者の行動は、見えないから危険」とであると認知され、生活環境において視覚障害者本人に役割を与えないことも一つの原因となっている。

A 氏は点字訓練を希望して訓練を申請したが、エンゲージメントの時点で、視覚障害者が生活上で困難を感じていることに対するデマンドとニーズの整理をすることで、「車通勤に関する不安」と「白杖を携帯することへの抵抗」が浮かび上がってきた。当事者が自ら生活を組み立てていく姿勢を援助するエンパワメントアプローチとして、情報提供の一環で視覚障害者の勤務する企業訪問を実施するとともに、夜間訓練の実施を計画することで、自ら通勤手段の変更を考えるようになってきた。このように対人援助技術としてソーシャルワークを実施することは、中途視覚障害者の障害受容の促進や社会復帰をするために重要な役割を果たしていると考えられる。